

演劇を取り入れた英会話学習の PBL の設計と実践

曾我 真人^{*1}, 西村 竜一^{*2}

^{*1} 和歌山大学システム工学部, ^{*2} 和歌山大学データ・インテリジェンス教育研究部門

Design and Practice of PBL for English Conversation Learning by Theatrical Performance

Masato Soga^{*1}, Ryuichi Nisimura^{*2}

^{*1} Faculty of Systems Engineering, Wakayama University

^{*2} Data Intelligence Education and Research Division, Wakayama University

We propose a lesson design for learning business English within a limited class time. We practiced the lesson incorporating the expressions learned there into creative English dramas with PBL, and learners presented them in a drama style. In addition, a questionnaire survey was conducted on the learners after the practice. We evaluated the goodness of the lesson design method. Furthermore, based on the results of the evaluation of lesson practice in the first year, the lesson design was slightly revised in the second year. We considered the best lesson design comparing the results of first year and second year.

キーワード: 英会話学習, 語学, PBL, アクティブラーニング, グループ学習, 演劇

1. はじめに

筆者は, システム工学部 3 年生を受講者として, 90 分×15 回の授業枠で専門選択科目としてビジネス英語を教えている. 2016 年度までは, 15 回すべてを座学での授業としていた. しかし, 教材がビジネス英会話でありながら, 英語を話す機会がなく, 文法解説はできても, 学習者が英会話文を作文したり, 発話する機会がなかった. これでは, ビジネス英会話を学習しても, それを応用する機会がないままでおわっていた.

そこで, 座学で基礎知識を教えたのち, PBL で英会話作文と発話の機会を与える授業設計を行うことにした. 具体的には, 前半の 10 回は, 基礎知識の学習を目的として, テキストを用いて主に座学形式でビジネス英語で用いられる様々な英会話表現について講義を行う. 11 回目の授業枠を使ってその基礎知識の習得状況を確認するために筆記試験を行っている.

その後, 12~15 回目の授業枠は, 前半の授業で学習した基礎知識の応用力を獲得することを目標として, PBL によるグループワークと発表会を行っている.

2. 関連研究と本研究の位置づけ

Henry Caldwell Cook は, 1910 年代に独自の教授法である "PlayWay" において, はじめて国語(英語)教育

に演劇を導入した(1). その後も, 様々な場所で, 演劇を語学教育に応用することは実践されてきたと考えられる. そのような実践は, 例えば, 京都女子大学では, 卒業研究演習にて, 十分に時間をかけて英語での演劇が実演されている(2). 塩沢(3)は, PETA (Philippine Educational Theatre Association : フィリピン教育演劇協会) における演劇と芸術教育のワークショップの体験から, 演劇の英語教育への応用について考察している.

このように, 演劇を英語教育に利用する試みや, 報告はいくつかみられるが, いずれも人文系学部において十分な授業時間を前提に行われ, 考察されている. また, 意外にも実践後の学習者による評価がほとんど報告されていない.

そこで, 本研究では, 理工系学部の学習者に対して, 限られた授業時間内でビジネス英語の基礎を教え, そこで学習した表現を, PBL で創作英語演劇に盛り込み, 演劇仕立てで発表するという授業設計の提案と, 事後に学習者にアンケート調査を行って, その授業設計方法の良さを評価することを目的とした. さらに, 2018 年~2019 年の 2 年間にわたりその授業構成で対面授業として実践を行い, 1 年目の授業実践の評価の結果から, 2 年目は少し授業設計を修正した. そして, ほぼ同じアンケート項目で調査を行い結果を比較するこ

とにより、1年目と2年目の差を根拠として、よりよい英会話学習のPBLの在り方を考察する。

2.1 前半の座学形式の講義内容

前半の10回の講義では、テキストとして、「場面別会社で使う英会話—きちんとしたビジネス英会話を学びたい人向けの本」(CD book) 味園 真紀, ペラルタ 葉子著, ベレ出版, 308 ページ, 2002/11/1 刊 を利用している。このテキストは、様々な英会話文を場面別に章に分けてもりこみ、ネイティブによる英会話音声吹き込んだCDの2枚組みが附属している。全部で12章からなるテキストで、各場面で使われる典型的な会話文と、その場面でのほかの言い回しを応用表現として記載している。このうち、時間的な都合で、1章「挨拶・紹介」、2章「アポイントメント」、3章「来客・訪問」、5章「会議・打ち合わせ」のみを、90分×10回の授業で主に座学形式で教えている。授業は教員(筆者)が事前に重要な表現や文法事項をPPTにまとめて準備し、そのPPTの英文を空欄にしてプリントアウトしたものを授業で配布し、受講者は授業中に教員の説明を聞き、PPTを見ながら空欄を埋めていくという形式で学習を行う。毎時間の最後の10~15分を利用して、その授業で学んだ表現の復習または応用として、和文英訳の課題を出題し、解答させ、提出させている。

2.2 後半のPBLの設計

前半10回の授業で習得した基礎知識を、実際の場面で応用する力をつけるために、後半4回の授業ではPBLを取り入れている。

後半の4回の授業枠のうち、最初の2回はグループワークとして英会話文の創作時間に充て、後の2回は発表会に割り当てた。発表会では、2018年度は、受講者数が64人で、合計16班を8班ずつ2回の授業に分けた。2019年度は受講者数が61人で、合計15班を8班と7班に分けた。そして、演劇形式で発表会を行った。具体的には、英会話文を記載したPPTファイルをスクリーンに投影しながら、グループのメンバーが教卓付近のスペースで演劇仕立てで演じながら発表するというものである。

創作する英会話文について、具体的に以下のように

仕様を決め、グループワークを始める最初に、受講者に伝達している。

(1) 話者の数(登場人物の数)はグループの構成人数とする。4人グループなら、登場人物は4人となる。

(2) 前半の座学で学習した関係代名詞 **what** を含む文を、各登場人物の台詞に1文ずつ含むように会話文を作成すること(これは必須条件)。また、前半の座学で学んだその他の表現をある程度盛り込むことが望ましい(これは努力目標)。

(3) 発表会では、グループの構成人数の登場人物に、役を割り振って、英会話としてプレゼンする。

(4) 各人が、少なくとも、4回の発言をするように、会話文を作成すること。つまり、各人が4回発言すると、4人×4回=16となり、16回のやりとりがある会話文となる。ただし、授業時間の都合上、最大は各人10回までとする。

(5) プレゼン時間は、最長で5分以内とすること。

(6) 評価は、作文の内容(文法の正しさ、内容の面白さ、内容を良く練っているかどうか、内容や **what** 節を含む文のオリジナリティ)と、発表会の英会話の良さ(発音、イントネーションなど)、で評価を行う。

(7) 文法ミス減らすために短い会話文とするよりは、プレゼン制限時間5分以内であれば、文法ミスが多少多くても、長い会話文を作成したグループの努力を評価する。

(8) 発表は、PPTを見ながらしゃべっても良いが、なるべく暗記することが望ましい。

(9) 会話文の最後にオチがある面白い内容や、ジェスチャーを交えての演技力も評価する。自作した小道具を用いることも、評価する。

このうち、(2)の条件として、関係代名詞 **what** を用いて会話文を作成させている理由は、ひとつは、関係代名詞 **what** は応用が比較的難しい文法事項であることから、それを実践で使えるような応用力を身につけてほしいという願いから、このPBLの学習目標のひとつにしているためである。もうひとつは、このような制約条件を課すことにより、Webサイトなどからの会話文の丸写しを防ぎ、会話文を学生たち自ら考えて、英作文を行わせる狙いがある。

3. 演劇形式の発表会

発表者以外は、配布した相互評価シートに発表を視聴しながら評価を回答する。相互評価シートは、内容の面白さ、文法単語の正しさを5段階で評価させ、各日ごとに、良かった発表を3つ以内で○、特に良かった発表に◎をつけさせた。この相互評価シートの目的は、記入者の氏名と学籍番号を書かせることにより、最後に回収して、出欠をとることが、教員側の目的である。さらに、この相互評価シートを記入するためには、発表者以外の受講者が、発表を視聴する動機付けを得ることになる。発表を視聴せずに、スマホなどで遊んでしまうのを防ぐ効果があると考えた。

演劇発表会の様子は、事前に学生に周知したうえで、カメラで撮影を行った。教室後方から撮影した発表の様子を、事後に各班毎に Moodle 上の授業ページにアップロードし、感想書き込み欄を用意して、感想を書き込ませ、振り返りによる相互評価を行った。

演劇発表会の様子を撮影する目的の2つ目は、教員が、成績評価時に、録画ビデオを視聴しながら、採点するためである。しかしながら、2018年は、役札をつけなかったために、録画ビデオを教員が視聴しても、顔と名前が一致しない受講者が多く、個人ごとの採点が容易ではないということがあった。その反省から、2019年は、前半のグループワークの時間を使って、配役名を画用紙に記載させ、それを首から下げるように紐をつける作業を各人に行わせた。そして、PPTの発表英会話文にも、配役名を記載させた。これにより、教員が後で発表の様子を録画したビデオを視聴すれば、演者の配役名がわかり、提出させるPPTの表紙に、配役名と氏名の対応がわかるように記載させることで、個人ごとの採点が容易になった。この配役名の名札を作成することは、受講者にとって、ワークショップ的な要素もあり、グループワークが楽しくなるとともに、発表時に他の受講者が視聴するときにも、演劇の流れを理解しやすくなるという効果もあった。

2018年度は、16班のうち、特に内容が面白く、かつ、演技力も高かった発表が4件あった。そのうち、図1は桃太郎の話を変えたストーリーで、はちまき、財布、黍団子袋などの小道具を用意し、桃太郎役はジェスチャも豊富に、ほとんどPPTを見ずに演じき

た。2019年度は、15班のほとんどが、気合の入った内容で面白く、落ちがあるものが多くあった。



図1 演劇形式の発表会の様子

4. 2018年度と2019年度の違い

両年度の授業は、ほぼ同じ設計で行ったが、2018年度のアンケート結果からの反省点を踏まえて、2019年度は改善を行った。両年度の違いを表1にまとめる。次章でのアンケート結果は、この違いが要因となって結果に反映されたと考えられるものがある。

表1 2018年度と2019年度の授業設計の違い

	2018年度	2019年度
教室の机	固定机	可動機
配役名札	指示なし(一部のグループは自主的に装着)	ワークショップ形式で全員が自作し、首から下げて演じた
創作英会話文の重点的評価箇所の指示	前半の座学での会話表現を入れることを事前に指示.	前半の座学での会話表現を入れることも評価するが、特にストーリーの面白さと落ちがあることを高く評価することを指示.
小道具の有無	指示なし(一部のグループは自主的に作成し装着)	小道具を自作して用いれば、それも評価すると指示
スクリーン上の提示物	英会話文(必要に応じて絵や写真)	英会話文+和訳(必要に応じて絵や写真)

5. アンケート調査の結果と考察

最終日の発表会終了後に無記名アンケートを行った。2018年度と2019年度のアンケート内容は17問まで同一で、2019年度は、それに、ストーリーと会話文作成のオリジナリティなどのアンケートを4問追加した。紙面の都合で主なアンケート結果について述べる。

質問1. 授業時間外の作業の合計時間

これについて、受講者の平均時間は、2018年度が3.8時間で、2019年度が5.8時間であった。このことから、2019年度のほうが、2時間も授業外作業時間が増えた

ことになる。このこともあって、2019年度の発表会の英語演劇の内容は、2018年度よりもかなり充実していた。

質問 2. 積極的にグループ内での演習にとりくんだか
この質問では、結果は図 2 のようになり、両年度とも「ほとんど取り組んでいなかった」と回答した受講者は皆無であり、「ある程度とりくんだ」と「積極的にとりくんだ」はおよそ半々であるが、2019年度のほうが「積極的に取り組んだ」の割合が増加した。

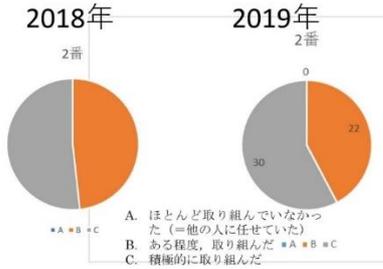


図 2. 質問 2 の結果

質問 5. 他のグループの発表を視聴したか？

A. 全く視聴していなかった。 B. あまり視聴してなかった。 C. 半分くらい視聴した。
D. かなり視聴した。 E. すべて視聴した。

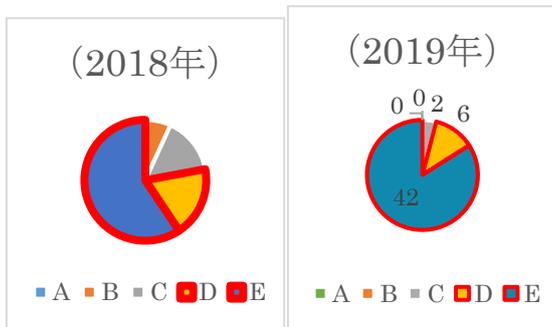


図 3. 質問 5 の結果

この結果は図 3 のように、D と E の回答を合わせた割合は、2018 年の約 80% から 2019 年の約 95% へ約 15 ポイント増加した。特に、2019 年は、E が 80% を上回った。これは、2019 年はほとんどのグループの発表が面白かったためと考えられる。

質問 6. 質問 5 で A または B と答えた人に伺います。視聴してなかった理由は？ (複数選択可)

A. 発表者の声が聞こえなかったから。
B. スライドの文字が小さすぎて、読めなかったから。
C. 最初は聞いていたが、次第に飽きてきたから。
D. 友達と雑談していたから。
E. 他の発表を視聴しても何も学ぶものがないから。

F. 他の発表を視聴しても、成績には関係ないから。



図 4. 質問 6 の結果

結果は図 4 のとおり、A と C が多く、2018 年はストーリー的には面白くない発表があり、C の回答が多かったと考えられる。なお、2019 年度は質問 5 で A, B を選択した回答者は皆無であったため、結果はない。

質問 7. 質問 5 で、C, D, E のいずれかに回答した人に伺います。視聴して、勉強になりましたか？

A. 他の発表を視聴しても全く勉強にならなかった。
B. 他の発表を視聴してもあまり勉強にならなかった。
C. どちらとも言えない。
D. 他の発表を視聴するとかなり勉強になった。
E. 他の発表を視聴するととても勉強になった。

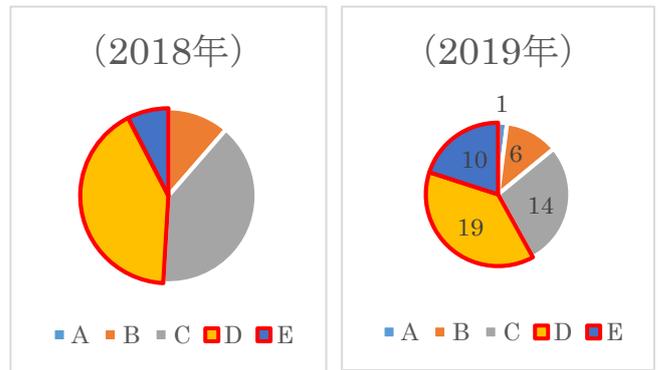


図 5. 質問 7 の結果

結果は図 5 のように、D と E を合わせた肯定的回答が 2018 年度の約 50% から 2019 年度は約 60% に増加した。2019 年度は面白い発表が多く、他の発表を真剣に視聴した結果、勉強になった割合が増加したと考えられる。

質問 9. 発表直後に、教員から文法や表現の適切性についてももらったコメントは勉強になったか？

A. 全くならない。 B. あまりならない。 C. どちらとも言えない。 D. かなりなった。 E. とてもなった。

結果は図 6 のように、D と E を合わせた肯定的な回答は両年度とも 70% 以上であった。教員 (筆者) は、このために事前に PPT に目を通して予習を行い、コメントを用意していた。それを発表直後に指摘

することにより記憶にも残りやすく、好評であった。

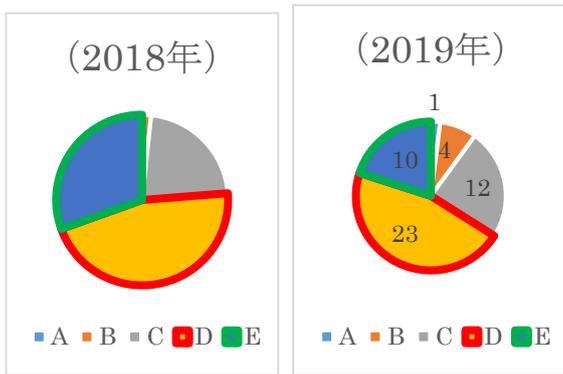


図6. 質問9の結果

具体的には、次のような意見があった。

- ・文法ミスの気づけていなかったところがたくさんあったので、そこを指摘してもらえてよかった。
- ・使い方があいまいでよくわからず文章に入れた語句などの解説がありがたかった。
- ・間違いの指摘だけでなく代替案まで言ってくれた。
- ・実際によく使われる表現を知ることができた。

質問10. 発表会の感想はいかがでしたか？

- A. つまらなかった. B. かなりつまらなかった.
 C. どちらとも言えない.
 D. かなり良かった. E. とてもよかった.

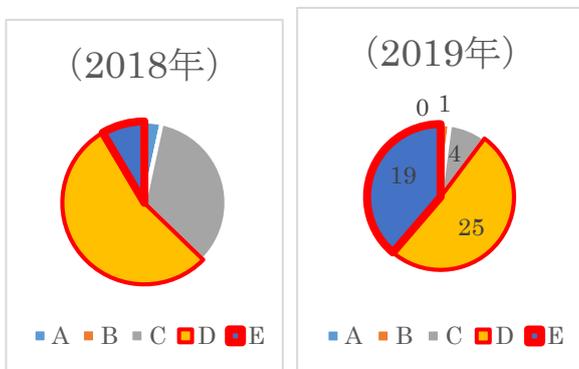


図7. 質問10の結果

結果は図7のとおりで、2018年に比べて2019年は「とてもよかった」の割合が約4倍に増加した。これは、ほとんどの発表が気合が入っていたため、視聴して面白かったことが反映されたのであろう。

質問11. 問10でA, B, Cを選択した人に伺います。どこがつまらなかったですか？

- これについては、2018年度は18件の回答があり、主なものとして、以下のような意見があった。
- ・つまらない班と面白い班の差が激しかった。
 - ・班によって完成度にムラがあった。
 - ・日本語訳がないとわかりづらい。

・劇な感触はなかった。

この反省から、2019年は演劇時にスクリーンに投影するPPTに英文だけでなく日本語訳を入れることをPPT作成時の仕様にもりこんだ。また、2019年は、内容の面白さや、落ちがあるストーリーを高く評価することを掲げた。このため、2019年度は質問11の回答数は大幅に減少した。

質問12. 問10でC, D, Eを選択した人に伺います。どこがよかったですか？

2018年度の回答から抜粋したものを以下に掲げる。

- ・聞いていて面白いプレゼンが多くてよかった。
- ・(教員のアドバイスで)文法の細かい使い方など細かい部分の修正はためになった。
- ・自分たちでは気づかなかった間違いが学べたこと。
- ・(教員が)訂正してくれたところ。

2019年度の回答から抜粋したものを以下に掲げる。

- ・どの班も面白い劇を作っていたので、見ていて楽しかったです。
- ・ストーリーの作り方が班ごとによって全然違って面白かった。
- ・英作の練習にもなったし、楽しくできた
- ・面白かった。他の授業とまったく異なるものだからこのように、2019年度は、ストーリーの面白さをあげる回答が多かった。これは、2018年度の質問11の回答結果から反省点を整理し、2019年度は、内容の面白さや、落ちがあるストーリーを高く評価することを掲げたことが、このような肯定的な回答につながったものと考えられる。

質問13. 今回は、関係代名詞Whatの文法に注力しながら、それを入れた会話文を作成するように指示しました。これは、文法に注意しながら会話文を作成してもらおう意図と、Web上からのそのままのコピペで会話文を作成するというのを防ぐ2つの効果を目的としています。これを踏まえたくて、次のうち当てはまるものを選んでください。

- A. 今回のように、文法に関する条件を入れて会話文を作成させるのは良いやり方だ
 B. 今回のように、文法に関する条件を入れて会話文を作成させるのは悪いやり方だ

結果は図8のように両年度ともAの肯定的回答を選択した受講者が75%を越えていた。ただし、コメ

ント欄では、すべての配役のセリフに関係代名詞
What を入れる必要はないという声があった。

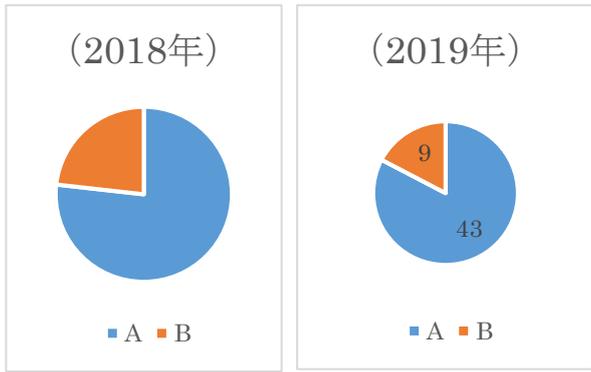


図8 質問13の結果

質問14 (2019年のみ) 今回の発表での英会話文について、以下の当てはまるものを選んでください。

- A. 英会話文は、ストーリーも含めて、完全に自分たちで考えたオリジナルのものである。
- B. 英会話文は、ストーリーはすでに世の中にある(例えば昔話や童話など)を参考にしたが、会話文そのものは、ほとんど自分たちで考えたものである。
- C. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から日本語のものを探してきて、それを英訳したまま。
- D. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から日本語のものを探してきて、それを英訳し、少し変更を加えた(例えば、What 関係代名詞を含む文を入れるなど)ものである。
- E. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から日本語のものを探してきて、半分くらい変更を加え、それを英訳したものである。
- F. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から英語のものを探してきて、そのまま使った。
- G. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から英語のものを探してきて少し変更を加えた(例えば What 関係代名詞を含む文を入れる)したものである。
- H. 英会話文は、ほか(例えばネット上)から英語のものを探してきて、半分くらい変更を加えた。

結果は図9のように、AとB(どちらも英会話文はオリジナル)の回答が40名おり、これは約10グループに相当する。これは、全体の2/3の数のグループである。したがって、オリジナリティにこだわったグループが多かったことがわかる。これは、2.2節で述べたように、内容のオリジナリティも評価対象とするということに合ったためと思われる。

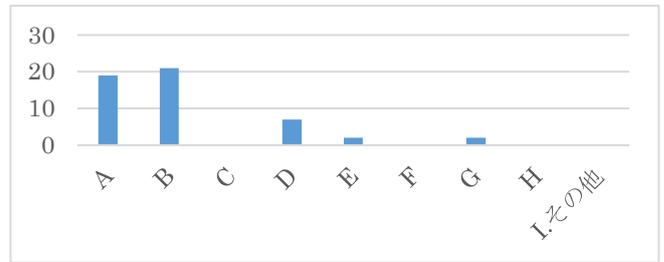


図9 質問14 (2019年のみ)の結果

6. 結論

2018年度は、前半の座学で学習した表現をとりこむことにある程度の重点をおいてPBLを行った結果、4つの班の発表を除くと、内容的に面白くなく、発表者以外の受講者で視聴していない学習者がある程度いた。これを改善するために、2019年度は、前半の座学で学習した表現をとりこむことも評価するが、内容の面白さ、落ちがあることなどにも重点を置いて評価することを事前に伝えた。その結果、ほぼすべての班の内容が面白く、自身の発表でないときにも、熱心に発表を視聴した。前半の座学で学んだ表現を多く取り込もうとすると、内容がビジネスに限定されて面白さが減る傾向にある。しかし、2~3の班では、昔話等を変形した面白いストーリーに、座学で学んだ表現を取り入れる工夫をしていた。座学で学んだ表現の取り込みとストーリーの面白さの両立が重要であると言える。

謝辞

本研究の一部は、和歌山大学の教育改革推進経費、および、科研費JP19K21771の助成を受けたものです。

参考文献

- (1) YODA, Manami: Henry Caldwell Cook's "Play Way" in Language Education, 人間・環境学 19, 79-92, 京都大学大学院人間・環境学研究科 (2010)
- (2) 日高真帆: “英語劇の上演と大学教育への応用”, 英文学論叢, 第56号, 10-16, 京都女子大学英文学会 (2012)
URI: <http://hdl.handle.net/11173/89>
- (3) 塩沢泰子: “演劇の手法・理論を導入した新しい英語教育の可能性 —— “Asian People’s Theater Workshop and Philippine Exposure 2007” —— 文教大学湘南総合研究所「湘南フォーラム」12, 33-43, (2008)